

小泉八雲集

上田和夫訳

新潮文庫

こいづみやくもしゅう
小泉八雲集



定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 94

昭和五十年三月五日印刷
昭和五十年三月十五日発行

訳者 上田和夫

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・塚田印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社

© Kazuo Ueda 1975 Printed in Japan

文庫

小泉八雲集

上田和夫訳

新潮社版

2202

目次

『影』(Shadowings)

和解 (The Reconciliation)	二
衝立の乙女 (The Screen-Maiden)	一六
死骸にまたがる男 (The Corpse-Rider)	二三
弁天の同情 (The Sympathy of Benten)	二九
鮫人の感謝 (The Gratitude of the Samébito)	三六

『日本雜記』(A Japanese Miscellany)

守られた約束 (Of a Promise Kept)	四三
破られた約束 (Of a Promise Broken)	四九

果心居士のはなし (The Story of Kwashin Koji)	九二
梅津忠兵衛のはなし (The Story of Umetsu Chūbei)	九三
漂流 (Drifting)	七四

『骨董』 (Kottō)

幽霊滝の伝説 (The Legend of Yurei-Daki)	八四
茶碗の中 (In a Cup of Tea)	八八
常識 (Common Sense)	九二
生霊 (Ikiryō)	九六
死霊 (Shiryō)	一〇一
おかめのはなし (The Story of O-Kamé)	一〇四
蠅のはなし (Story of a Fly)	一〇九

雉子のはなし (Story of a Pheasant)	131
忠五郎のはなし (The Story of Chūgorō)	136
土地の風習 (A Matter of Custom)	138
草ひばり (Kusa-Hibari)	136

『怪談』 (Kwaidan)

耳なし芳一のはなし (The Story of Mimi-Nashi-Hōichi)	133
おしどり (Oshidori)	134
お貞のはなし (The Story of O-Tei)	130
乳母ざくら (Ubazakura)	135
かけひき (Diplomacy)	134
食人鬼 (Jikininki)	130

むじな (Mujina)	一六七
ろくろ首 (Rokuro-Kubi)	一七〇
葬られた秘密 (A Dead Secret)	一七二
雪おんな (Yuki-Onna)	一七六
青柳のはなし (The Story of Aoyagi)	一七九
十六ざくら (Jiu-Roku-Zakura)	一八〇
安芸之助の夢 (The Dream of Akinosuké)	一八〇
力ばか (Riki-Baka)	一八三

『天の川物語その他』 (The Romance of the Milky Way
and Other Studies and Stories)

鏡の乙女 (The Mirror Maiden)	一八六
--------------------------------	-----

『知られぬ日本の面影』 (Glimpses of Unfamiliar Japan)

弘法大師の書 (The Writing of Kōbōdaishi) 二二六
心中 (Shinjū) 二二一
日本人の微笑 (The Japanese Smile) 二二九

『東の国より』 (Out of the East)

赤い婚礼 (The Red Bridal) 二六八

『心』 (Kokoro)

停車場にて (At a Railway Station) 二九四
門付け (A Street Singer) 二九七
ハル (Haru) 三〇四

きみ子 (Kimiko) 三二二

『仏陀の国の落穂』 (Gleanings in Buddha-Fields)

人形の墓 (Ningyō-no-Haka) 三二八

『霊の日本にて』 (In Ghostly Japan)

悪因縁 (A Passional Karma) 三三六

因果ばなし (Ingwa-banashi) 三三三

焼津にて (At Yaidzu) 三三八

注・解説・年譜 上田和夫 三六一

小泉八雲集

『影』

和解

むかし、京都に一人の若い侍がおり、主家の没落のため生活に窮してきたので、家をはなれて、遠国の国守に仕えることになった。都を去るまえに、この侍は、妻を離縁した——善良な美しい女だったが、別の縁組によって、もっと出世しようと考えたのである。それから彼は、かなりの家柄の娘と結婚して、自分の任地へ連れて行った。

しかし、この侍が、愛情の価値もわからずにこうもあっさり捨て去ったのは、まだ思慮の足りない若年の頃のこと、身を切るような貧乏にあえいでいるときであった。彼の第二の結婚は幸福なものではなかった。新しい妻の性格が、冷酷でわがままだったのである。やがて彼は、折にふれて京都のころを悲しく思い出すようになった。それから、自分がまだ最初の妻を愛していることに——第二の妻よりもずっと、彼女を愛していることに気づいた。そして、自分がいかに不当で恩知らずであったかを感じるようになった。しだいに、彼は後悔のあまり自責の念に駆られて、心の平静を失った。あのひどい日にあわせた女の記憶が——あのやさしい話しっぷり、微笑、上品な、愛らしい仕草、非の打ちどころのない忍耐が——たえず彼の頭からはなれなかった。時には夢のなかで、彼は彼女が、あの窮乏のころ、夜となく昼となく精を出して彼を助けてくれた

ときのように、機を織っているのを見た。が、もっとしばしば見たのは、自分が置き去りにしてきたあの荒れた小部屋に、ひとり坐って、あわれにも破れた袖で、涙をかくしている彼女の姿であった。務めのあいだにも、彼の心はつい彼女のほうへさまよって行った。そして、彼女がどう暮し、何をしているのか、胸に問うてみた。どこか心のなかでは、ふたたび夫を持つはずはないし、自分をゆるしてくれないこともなからう、と思われた。そこで、彼はひそかに京都に帰れるようになったらすぐ彼女をさがし出し——それから、彼女のゆるしを乞い、連れもどして、罪滅ぼしに、できるだけのことをしてやろうと決心した。しかし歳月は過ぎた。

ついに国守の任期も終り、この侍は自由になった。「さあ、彼女のところへもどるのだ」彼は誓うようにいった。「ああ、彼女を離縁するなんて、なんとという残酷な——なんとという愚かなことをしたものだろう！」彼は第二の妻を親許へかえした（彼女に子供がなかったのである）。そして京都へ急ぎ、ただちに——旅装をあらためる暇も惜しんで——かつての配偶をさがしに出かけた。

以前彼女の住んでいた町に着いたときは、すでに夜もふけていた——九月十日の夜なのである。そして都は、墓地のように静まりかえっていた。しかし、月光は皓々として冴え、あらゆるものを明らかにしていた。家を見つけることに困難はなかった。家は、見るからに荒れはてていた。屋根には丈高い草が生い茂っていた。雨戸をたたいたが、だれも応ずる者がなかった。そこで、内から戸締めしてあることがわかったので、彼は押しあけて中へはいった。表の間は畳もなく、

がらんとしていた。冷たい風が敷板の割れ目から吹きこんでくる。そして月光は、床の間のでこぼこした破れ壁から射し込んでいた。ほかの部屋も、同じように荒れはてた様子を見せていた。家には、どう見ても、人の住む気配はなかった。それでも侍は、さらに家のいちばん奥の一室——妻がいつも居間に使っていた、ごく小さな部屋をのぞいてみることにした。その部屋を仕切っているふすまに近づくと、中からあかりがもれているのでびっくりした。彼はふすまをあけて、よろこびの声をあげた。彼女がそこに坐って——行燈あんどんのかげで縫い物をしているのを見たからである。その瞬間、彼女の目は彼の目と同時に出会った。そしてうれしそうに微笑しつつ、彼女はあいさつした——ただ、こう訊ねたのである、「いつ、京都へお帰りになられましたか？　こんな暗いお部屋をいくつもお通りになって、よくわたしのところが、お分りになりましたかね？」歳月は、彼女を変えていなかった。今もなお、あの甘い思い出の中にあつたように、美しく若かつた——が、どの思い出にもまして快く、妙たえなる彼女の声が、うれしい驚きで震えをおびて、耳に聞えてきた。

それからうれしげに、彼は彼女の横に坐って、ことの仔細しさいを語った——どんなに深く自分のわがままを後悔したか——彼女がいなくてどんなにみじめであったか——どんなに絶えず彼女のことを後悔していたか——どんなに長いあいだ償いをしたいと考えていたか——ずっとそのあいだも、彼女を愛撫あいぶしながら、何度も繰り返しかえしゆるしを乞うた。彼女は、彼が心から望んだように、情をこめ、やさしく答えて——そんなに自分を責めるのはやめてほしいと哀願した。わたしのために苦しむのは間違っています、と彼女はいった。わたしはいつも、あなたの妻にふさわしくな

いと感じていた、というのである。にもかかわらず、彼が彼女と別れたのが、たんに貧乏のゆえにほかならなかつたことを知っていた。一緒に暮していたころ、彼はいつもやさしかった。それで、彼女はずっと彼の幸福を祈りつづけていたのである。しかし、かりに償いをするだけの理由はあるにしても、こうしてわざわざ訪ねてきてくれたことは、償いとして十分あまるほどだ——たとえ、束の間つかにせよ、こうしてふたたび会えることにまさる幸福があるだろうか。「ほんの束の間だと！」彼は、うれしそうに笑いながら答えた——「いや、どうして、七生かけてもだ！ お前さえいやでなければ、いつまでも——いつまでも——いついまでも、一緒に暮そうと思っでもどってきたのだ！ もう二度とわれわれを引き離すものはない。今では、金も友人もある。貧乏なんか怖れる必要はないのだ。明日は荷物をここへ運び込もう。召使たちもきて仕えてくれる。そしたら、この家をきれいにしよう。……じつは今夜」と弁解するかのよう、彼はつけ加えた、「こんなに遅く——着物も替えずにやってきたのは、ただお前と会って、このことを伝えてやりたいと、思ったからだ」彼女はこれらの言葉を聞いて、たいそううれしげに見えた。そして今度は、彼女のほうから、彼が去ったとき以来、京都におこつたことを一部始終、語つた——ただ自分の苦勞についてだけは、やさしく触れることを拒んだ。二人は夜のふけるまで語り合つた。それから彼女は、南に面した暖かい部屋——かつて二人の新婚の間であつた部屋へ彼を案内した。「この家には、だれか手伝ってくれる者はいないのかね」彼女が床をとりはじめると、彼は訊ねた。「ええ」彼女は、ほがらかに笑いながら答えた、「とても召使なんか、置くことができませんでした——それで、ずっと一人で暮してきました」「明日からたくさん召使をかかえよう」